

# 広野文芸欄

季題 当季自由句

## 広野町水無月句会

遠藤健太郎

高架道の橋脚映す植田かな  
吟行ののんどが乾く麦の秋  
吾が肺の若葉の風に染まりけり

鯨岡 一生

いっせいに喉元そらす燕の子  
今宵また酒の肴の冷奴  
園児等の声かけ放す小鮎かな

根本 山水

晚酌を楽しみにして野びる採る  
初蝶のあとゆつくりと歩みけり  
山桜風ぬくもりて散りはじむ

阿部 真生  
溪谷の明るくなりぬ岩つつじ  
青芝やパークゴルフのにぎやかに  
妻と吾桜シャワーを浴びるたり

塩 史子

暮れ初めし山の端の空柿若葉  
朝な夕な奥の山よりほととぎす  
雨来ると見越して茄子の苗を植う

山田 基星

すかんぼの穂先の染まる畦の道  
つばなの穂兎の手にそつと触れており  
雨あがり孫とあそべるあめんぼう

酒井 津祢

花ざかり小学校は授業中  
野いちごの花ぐり来て水速し  
五六基の山墓つつむさくらかな

西山子

幼な児の味覚に戻る柏餅  
連山の緑を深め夏来る  
筍の香に満たされる厨かな

宮下 純子

水色の空に反転鯉のぼり  
ひとり待つ町民バスや柿若葉  
母の日や宅配で来るワンピース

鯨岡 正子

茶柱の立つよろこびよ柏餅  
みどり色シャツ干しにけり五月晴  
鼻唄でカッコワルツキウリ漬け

## 広野みなづき短歌会六月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

年老いて吾が身案ずる事多く孫の行く末  
語るも楽し  
五月なか孫の誕生祝ひつつ素直に正しく  
生きよと祈る 猪狩ユリ子

一人暮しは吾だけにあらずと思ひどもと  
きに淋しさひしひしと沁む  
デイケアの迎えの車待ちつつも思はず仰  
ぐ真青なる空  
「わが父は死にたりと思ふ」の手紙見ぬ娘  
への思ひのかく切なるを 小澤 健次

待ち時間長きをかこつ老患者に若き看護  
師笑顔にさとす  
絶え間なく診察続くもにこやかに「その  
後いかが」と医師はやさしく  
山あひを走る車窓に映る景濃みどりさみ  
どりみどり百景 木村ミヨ子

一人暮しとなりて十五年み仏に香捧げつ  
つ無欲にくらす  
そうそうとせせらぎ聞きつつ山路ゆく四  
囲の緑に身も染まりつつ  
吾が庭に自然に生える路わらび今年も伸  
び立つさみどりのし 菅原 泰郎

梅雨の雨しとどに降れば公園に人影もな  
く若葉しづくす  
月出でて仰ぐ今宵の淋しさよ親しき人の  
訃報届きて  
降り止まぬ小庭に見つつ親しきかかたつ  
むりいくつひつそりと這ふ 田副 耕一

女性の輪広くなされと言ふごとく壇上に  
飾る大輪の牡丹  
泣く孫も乗り超えられたる五月病園児の  
バスよりもみじの手を振る 新田 里子

筍を早速煮しと電話あり亡母とも紛ふ叔  
母の声する  
ブロッコリーの膚となれる幼孫みどりの  
小房競ひ摘みゆく  
カタログに気に入りたる品ありたれば吾  
はさっそく葉書したたむ 山内 洋子

思ひたち父の墓処に詣でたりしばしの無  
沙汰心に詫びつつ  
しみじみと滲む思ひに手を合はせありし  
日唄び心に語る 藤田 孝夫

水引草は鹿の子絞りに群れ咲きてそのめ  
ぐりより涼風の立つ  
合観の花の零程なるしあわせと告げて別  
れぬ虚実いくばく  
目に見ゆる幸福ならむ別れゆく後姿に祈  
る友のしあわせ  
しあわせの形残れるアルバムの父母にし  
みじみ言葉なく会ふ  
ふさわしき花見当たらぬ大き壺水を満た  
してしばらくを置く  
いかなることのありても不思議なき齡と  
歌ひし人の思ひ眩しむ

穀雨とふ言葉知りたり夕まけて音なく浸  
むる春の糠雨  
モツアルトのアダジオ相応ふ寺院に百年  
の枝垂桜の花枝地をする 山口 歌子

